

NATURE

ネイチャー



4 ライオン

貫禄たっぷりに水場へと向かう雄ライオン



動物写真家 須藤一成

南アフリカで僕がよく訪れるクルーガー国立公園やカラハリトランスフロンティアパークは、広大な自然公園だ。日本の四国よりも広く、特にカラハリは南アフリカとボツワナの国境をまたいで広がり、四国の2倍以上もある。100年ほど前から野生動物の保護区となっているので、動物たちは人間をほとんど恐れない。

初めてクルーガーを訪れた時、僕は日本での撮影と同様に、動物が逃げないように距離をとって撮影していた。しかし、後から来た車が僕を追い越してすぐ近くから撮影を始めた。動物のほうも全々人間に動じることもなく、悠々と行動しているではないか。100年も守られていると、野生動物はこれほどまでに人間を恐れなくなるものなのかと感心した。

特にライオン、ヒョウ、チーターなどの大型肉食獣は、人間を恐れないどころか人間な

ど全く見えていないかのような振る舞いで、木や草と同じ扱いだ。車と車の間を縫うように歩き、人間の様子をうかがうこともない。これほどまでに無視されると、わざと見ないようにしているのではないかと思えてくる。

ある時カラハリで、車の前部に潜り込むように1頭のライオンが横たわり、その横に2頭のライオンが同じように寝そべっているのに出会った。交通事故かときよっとしたが、よく見ると口陰で昼寝をしているだけのようなのだ。

あまりに大胆なこの行動や人間を無視する行動など、ライオンは彼らのほうが人間より優位であるという感じがするのはないかと思えてきた。「俺たちのほうが強いんだから、人間など気にする必要はない」とライオンたちの声が聞こえてきた。

そこにいるものを少しは気にして見るのは

人間より優位、カメラの前でも悠然と

自然なことなのに、人間を無視するライオンの行動が不思議だった。しかし、優位性のアピールと考えると、ライオンの行動が少し理解できるような気がする。

もう一つ不思議だと思っていたことがある。大型肉食獣が人間を全く気にしていないのに対して、草食獣たちは少し様子が違う。人間を恐れている訳ではないのに、しばらく見ているとゆっくり遠ざかって行く。草食獣のほう人が馴れにくいのだろうと思っていたのだが別の理由があることに気がついた。

肉食獣は人気があるので、人々が集まって来る。そのことに草食獣たちが気づいたのだ。だから車を止めてしばらく撮影をしていると、草食獣たちはライオンがいるのではと不安になって少しずつ遠ざかって行くのだった。

人間を見ると、血相を変えて全速力で逃げ出す日本の野生動物とは大きな違いだ。アフリカから帰って日本で撮影をする時、僕はいつもつぶやいてしまう。「なんでそんなに遠くから逃げて行くんだ」と。



大きな鋭い角を持つ草食のオリックス。撮影していると徐々に遠ざかって行くことが多い

▲ 車を通せん坊するように昼寝する

すどう・かずなり 1961年、京都府夜久野町(現福知山市)生まれ。イヌワシに魅せられ、滋賀を拠点に日本やアフリカで野生動物の撮影に取り組む。米原市在住。写真集「Golden Eagleイヌワシ」(平凡社)、DVD「ブラックイーグル」「ツキノワグマ」など。

